

植物雑記 (103)

野草の楽しみ [4] イネ科その一

〔「野草の楽しみ」前回掲載は本誌 66 号 (2003 年)〕

南浜 野生植物調査室 長谷川 義人 (本会顧問)

イネ科は属の数が大変に多く約 850 属 10,000 種以上あり、これを幾つかの亜科に分ける試みは多くの説があり、もっとも単純にタケ亜科とイネ亜科とし後者をイネ連とキビ連とに分ける説から、全体を 7-8 の亜科にする説や連、亜連を多く認める説がある。今回は種についての論考であるので、本稿では属以上の大きい分類には触れない。

葉面の反転

イネ科の植物には大変に奇妙な種があって葉鞘に続く葉身の基部が反転して本来の上面 (向軸面) が下面の性質を持って向地性となり、本来の下面 (背軸面) が上面となり光沢を帯びようになるものがある。このような例の一部を挙げれば、ウラハグサ、アズマガヤ、カモジグサ、キツネガヤ、タキキビなどがあり、その例はまだまだあるであろう。ところでアズマガヤ *Hystrix long-aristata* (Hack.) Honda (1930)、Syn. *Asperella long-aristata* (Hack.) Ohwi のアズマは東国の意味と考えているが、私の識る産地は確実なところ 3 ヶ処で横浜にはないと思う。分布は北海道から九州までにあるが、近隣の植物誌を見ればこの種は茨城県、福島県では「普通」とあるけれど、表現どおりにあるとはとても考えられない。私が採集ないしは実見した産地は栃木県の石灰岩地と神奈川県北部であって、それぞれ 100 株単位である。静岡県では稀な植物のようである。長田武正先生はその著でやや稀な多年草としている。最も大量にあるのが何と千葉県の香取神宮の社叢林でここにあることは千葉県植物誌のために調査したときに発見し、数千株から一万本くらいはあるのではないかと考えられる。出穂期は早く 6 月下旬になると針状の 2 個の苞穎を残して小穂はポロポロと落下して標本にはならない。5 月中・下旬がよいのではないかと。最近ここに往く機会があり、カモジグサに少し似ているこの種を再度確認することができた。タキキビ (カシマガヤ) *Phaenosperma globosa* Munro ex Benth. は愛知県以西の分布で 1.5-1.8m にもなる植物で対馬産のタキキビを庭植しているが、穎果は完熟するとほぼ球形でコロコロと転がって、どこでも発芽して現在庭で大繁殖して困っている。葉は紙質で形態学上の上面は下面となつてほぼ粉白である。見かけ上の上面は緑色。5 月下旬には出穂し花糸の先に長さ 2.4mm の 2 室の葯 (孔開) を吊り下げる。日本の暖地、先島諸島や火山列島などにある帰化植物のギネアキビ *Panicum maximum* Jacq. を小型化した形に少し似る。

火山列島硫黄島で見たイネ科

第二次大戦の激戦地であった硫黄島は当然ながら自然も破壊されてあとから持ち込まれたり、帰化した植物が大半で気候的には亜熱帯の植生で東京から南へ 1,250km に位置する。

イネ科では次の種がみられる。ムラサキヒゲシバ (シマヒゲシバ) *Chloris barbata* Sw.、オヒゲシバ *Chloris virgata* Sw.、ニクキビ *Urochloa subquadripara* (Trin.) R. D. Webster、タツノツメガヤ *Dactyloctenium aegyptium* (L.) P. Beauvois、ハリケンススキ (ススキメヒシバ-初島住彦) *Trichachne insularis* (L.) Nees (Gen. *Digitaria* とするのはよくない、形状が全く異なる。)、スズメノコビエ *Paspalum scrobiculatum* L.、アメリカスズメノヒエ *Paspalum notatum* Flügge、タチスズメノヒエ *Paspalum urvillei* Steud.、シマスズメノヒエ *Paspalum dilatatum* Poir.、オガサワラスズメノヒエ *Paspalum conjugatum* Bergius、クリノイガ *Cenchrus brownii* Roem. et Schult.、シンクリノイガ *Cenchrus echinatus* L.、イヌメヒシバ (初島住彦同定) *Digitaria setigera* Roth ex Roem. et Schult.、ギネアキビ *Panicum maximum* Jacq.、エダウチチヂミザサ *Oplismenus compositus* (L.) P. Beauvois、ササキビ *Setaria palmifolia* (J. König) Stapf、シマササキビ (ヒメササキビ・許建昌同定) *Setaria barbata* (Lamarck) Kunth、ギョウギシバ *Cynodon dactylon* (L.) Pers.、シンサトウキビ *Saccharum officinarum* L.、ハマガヤ *Leptochloa fusca* (L.) Kunth、ヌカカゼクサ *Eragrostis amabilis* (L.) Wight et Arn.、イヌビエ *Echinochloa crus-galli* (L.) P. Beauvois、ヤダケ (ケナシヤダケ-室井紳-長谷川宅で栽培中) *Pseudosasa japonica* (Siebold et Zucc. ex Steud.) Makino ex Nakai、ホクチガヤ (ルビーガヤ) *Melinis repens* (Willd.) Zizka、トウミツソウ *Melinis minutiflora* P. Beauvois (標本はないが、腺毛からの粘液が朝陽を浴びて光っていた)。マキバチカラシバ *Pennisetum polystachion* (L.) Schult. subsp. *setosum* (Sw.) Brunken 他にもまだ在ったと思うが、約 10 回の渡島では仕事が忙しく硫黄島の島内を思うようには回れなかった。建設会社 (鹿島) に宿泊・食事・車輛などお世話になった。渡島については航空自衛隊入間基地・名古屋基地、海上自衛隊厚木基地のお世話になった。また当時の東京防衛施設局建設部にお世話になり、これら総ての各位に紙面をお借りして厚く御礼を申し上げる。なお主要な島産の標本は首都大学牧野標本館 (MAK)、国立科学博物館 (TNS)、千葉県立中央博物館 (CBM) に納入してある。

大井次三郎先生の同定品

私の草稿『横浜市内南部高等植物仮目録』(1958・以下改訂 1965/1967/1975) の当時の帰化植物不明品を国立科学博物館の大井先生に同定していただいた。ウマノチャヒキ *Bromus tectorum* L. (産地: 南区蒔田公園)、シラゲガヤ *Holcus lanatus* L. (産地: 金沢区富岡東・南区永田山王台)、ミノボロモドキ *Rostraria cristata* (L.) Tzvel. (産地: 港南区笹下町・狩場町英国連邦軍墓地) など他にカヤツリグサ科などもあったが、諏訪湖のイネ科採集品を所望され差し上げた。大井先生のことに関して北村四

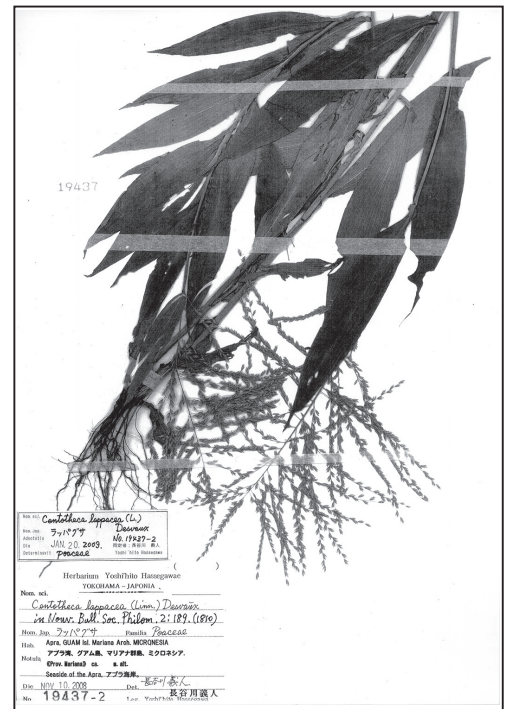
郎先生の「大井次三郎博士の伝」が『植物分類・地理』28 (4-6): 92-97 (OCT., 1977) に掲載され他に各氏の計4篇も続いている。

今は時代を反映しない私の『仮目録』は印刷されることなく、現在に至っている。これらの基礎標本は横須賀市立博物館に寄贈した。私が『仮目録』を纏めて10年後に出口長男『横浜植物誌』pp. 256+PL. 44 (1968) が出版され、出口先生は「本地域植物の調査研究に関しては、文献に直接関係ある研究者として11名の方々があげられる。」として松野重太郎、福田正作、牧野富太郎、久内清孝、宮代周輔、大谷茂、伊達健夫、鈴木重隆、榎山泰一、小泉和雄、長谷川義人の11名を挙げられ、その末尾に筆者を加えた。出口さんは県立鶴見高校に標本が保管され多分教諭として奉職した方ようで、この当時は横浜市教育委員会指導主事であり、保土ヶ谷区(旧)中尾町に居住され後大和市に移り亡くなられた。『多摩丘陵帷子川流域の植物』『横浜のシダ』『神奈川県植物』などを出版した篤学家で『神奈川県植物誌1988』で活躍した森茂弥(故人)、勝山輝男(現神奈川県立生命の星・地球博物館)の二人も鶴見高校の教諭であったことは何かの縁を感じるのである。なお私は「多摩丘陵と三浦半島の間地域植物」のテーマで横浜の植物について『神奈川自然誌資料』(15): 71-76 (1994) に執筆させて戴いた。

余談となるが、大井次三郎先生の同定品にアカザ科のミドリアカザ *Chenopodium bryoniifolium* Bunge ex Trautv. (標本は横須賀市自然・人文博物館[YCM]に寄贈)があり、私はこの稀品を昭和29年夏に秩父黒谷で採集した(現在はこの産地は失われた)。不遇な種(産地:武蔵、下野など)であったが邑田仁・米倉浩司『日本維管束植物目録』(2012)に登載され嬉しく思った。イワアカザ(産地:信濃、本州西部、九州北部)とは全く違う種である。当時の科学博物館には佐竹義輔、大井次三郎、奥山春季の先生方もおられて私のようなアマチュアの者にも同定など気持ちよく対応されたが、上野という至近の地でしかもそれぞれの専門の方に教示を得られるので大助かりであった。

ラップグサとヒッパリガヤ

イネ科のラップグサ *Cenotheca lappacea* (L.) Desvaux を見たのは1979年にマリアナ群島、ロタ島のサバナ Sabana 高原(Savannaではない)でササのような葉を持ち、込み合ったパラグラスのような花序を持った草を採集した。それがラップグサであり、2008年に本会で催行したグアム島植物観察会でも Agat の Apra 湾に注ぐササ川の堆積地にこの植物を再度見ることができた。鈴木恕、磯部和久両氏には催行で大変お世話になった。この珍しい和名は多分、種小名《lappaceus》が基で、「かぎ状の刺毛・苞葉をもった」の意である。これと似た発想の和名にヒッパリガヤ *Hyparrhenia rufa* (Nees) Stapf があり、属名から発想したので、すぐに属学名が思い出せる。このイネ科の一品は鹿児島県の瀬川裕美氏が奄美・徳之島の亀津で発見したもので、和名は私の発案である。この帰化植物はアフリカ原産とのことで茨木靖(徳島県立博物館)、木場



ラップグサ
筆者採集標本
2008/11/10
グアム島
アブラ湾

英久(当時神奈川県立生命の星・地球博物館、現桜美林大学)の2氏共著で『植物研究雑誌』80 (4): 250-251 (2005) に「日本新産帰化植物イネ科ヒッパリガヤ」として発表された。この標本の重複標本は3点のみで全て提供したので現在、手元にはない。やはり重複標本 duplicated specimen として最低5点は欲しいものと思う。

コウヤザサとヒロハノハネガヤ

コウヤザサ *Brachyelytrum japonicum* (Hack.) Hack. ex Honda を神奈川県で最初に発見したのは私で、前者は1983.6.25.に箱根外輪山、三国山で神奈川県植物誌調査会の合同調査で私の車でこの不便な山に入った。ここで神奈川県新産のカナクギノキ、キヨスミミツバツツジを採集してコウヤザサも発見できた。この種は近畿圏で何度も採集し私には熟知した種であった。兵庫県佐用郡南光町船越、同佐用郡上月町櫛田、岐阜県高山市松倉山、その後も茨城県筑波山、山梨県南都留郡忍野村内野、同山中湖村平野、愛知県新城市吉祥山などである。ヒロハノハネガヤ *Stipa coreana* Honda var. *japonica* (Hack.) Y. N. Lee は南足柄市道了尊で1975.8.30.に採集している。この日、僅かに10点の標本が台帳に記録されているが、この種はNo. 5775-No. 5778の4点がありNo. 5775はKPM(県博・標本庫)に納入した。『神奈川県植物誌2001』に勝山輝男氏の山北町明神峠～峯坂峠1983.8.26.、この道了尊での早川亮太氏の採品1983.9.4.、勝山氏の湯河原町藤木川金山沢1997.9.6.、の3点が掲載されているが、早川(故人)と石橋賢治(植物誌1988)両氏の採集品は合同調査の当日、私が産地を教示して採集されたもので、私は8年前にこの場所で採集している。澤田武太郎先生の箱根仙石上湯(1929.7.26.)の記録他二三の記録があるが何れも証拠標本が無い。この種はやや稀なもので関東での産地を挙げると東京都西多摩郡日原町巳之戸沢、同奥多摩町大沢、川乗谷林道(牧野植物同好会)、埼玉県秩父郡横瀬町小島沢(牧野植物同好会)、などである。